

詩歌等の短文における文脈把握から
鑑賞に至る手法の検討
(論理系解釈のシステムの応用)

古閑 政
九州東海大学工学部経営管理学科

解釈のシステムとは、対象とするシステム(ベース・システム)に重畳する現象学的システムであり、且つ初期状態から結果状態が生じる過程を明らかにするシステムである。もし文章をシステムと考えるならば、文章を理解(文脈の把握)し、感興に至る(鑑賞)プロセスにもシステムが存在すると見做して、それを解釈のシステムと表現している。このとき初期状態とは、語句間の意味関係等の表面的構造の把握であり、結果状態とは、主張の鮮明化と感興の解剖である。そこで、言葉の構造が初期状態から結果状態へ遷移していく様子を検討し、その過程を分枝構造で表現した。

なお、確率系の解釈のシステムが確率的事象を扱ったのに対し、文章は論理的事象の集合であるので、論理系の解釈のシステムと呼称している。

STUDY OF CONTEXT UNDERSTANDING TO
APPRECIATION PROCESS ABOUT SHORT
TEXT SUCH AS POEM ETC.
(APPLICATION OF LOGICAL INTER-
PRETATION SYSTEM)

Masashi Koga
Kyushutokai University
Department of Business Management
9-1-1, Toroku, Kumamoto City, 862 Japan

Interpretation system exists on the concerned system (namely base system) and is considered a phenomenological system which describes the change from the original state to the result state of the target phenomenon. If we regard a text as system, the process from understanding to appreciation of a text might have a certain construction which is called 'interpretation system'. In this case, the original state stands for comprehension of the apparent structure such as relation among phrases, while the result state stands for the point or impression got by reading.

This paper discusses the transition process from the original state to the result one, giving the branching structure to the expression framework. As the interpretation here is logical, it should be called 'logical interpretation system', as compared with the probabilistic interpretation system which explains the change of disperse probability distribution in an event set.

1. はじめに

言葉は、言うまでもなく、ひとつのシステムである。そしてシステムが生成されるプロセスに着眼すると、話し言葉と書き言葉とは異なる点が多いが、完成された文のシステムとしての性質は、ほぼ同じであると考えられる。この論文では、書かれた言葉（つまり文章）を対象とするが、それは推敲され、練磨された言葉を対象とするということであって、話し言葉を除外するという意味ではない。

また、言葉の構造に着目する場合にも、文法を問題とするわけではない。例えば、子供が「僕は痛い」（表現Ⅰ）と言おうと、「痛い、僕」（表現Ⅱ）と言おうと、意味としては同じであり、文法面の相違点の問題にするわけではない。すなわち「僕は痛いと感じている」という意味を表現しているという点では、両者の言い方は全く同等であるとみなす。換言すれば、表現Ⅰが聞き手（あるいは読み手）の脳の中に喚起するイメージと表現Ⅱが喚起するそれは、全く同じであると考えている。

もっとも、話し言葉においては、時間的順序が何らかの重要性を持つ場合も考えられるが、書き言葉においては、意味の中に時間が含まれている場合を除けば、書かれた時間的順序によって意味が異なってくる事はない。すなわち、前者の典型例は「土地を買って（から）家を建てた」であり、後者の典型例は「景色を眺めながら、山道を登る（＝山道を登りながら、景色を眺める）」である。したがって、本論文では、これらの文も先程の例と同じ様に、「<土地><買った><家><建てた>」や「<景色><眺める><山道><登る>」という意味要素（<>内）の集合であって、意味要素（これらの例では単語になっている）の関係によって、あるイメージの表出がなされている、とみなす。

この関係について、「対称性」と「交差性」が重要な働きを持っているという観点から、「解釈のシステム」なる概念を、読者の立場からは意味の把握の手掛かりとして、作者の立場からは表現の技法として、下地である文の構造（ベースシステム）に重畳させる事を試みる。

特に詩文の理解や鑑賞にあたって、ここで提起する「解釈のシステム」のモデルを適用する事が

役立つのではないかと思い、提案するものである。

なお、時枝の文章研究においては「文章とは時間的に展開するもの」とある¹⁾が、時間が読解に大きな影響を与えるほど、長い文章の分析に役立つ手法を論じるものではない事を特に断っておきたい。

2. 「解釈のシステム」の観点

2. 1 確率系「解釈のシステム」

（解釈の確率系システム）

この節と図1を頁数削減のため省略、当日発表

2. 2 論理系「解釈のシステム」

（解釈の論理系システム）

上記に対し、文章をシステムとして検討の対象とする時は、要素事象間に確率的にみた生起の関係が存在するとみる事は出来ない。この時は、むしろ論理的な関係が存在するとみるべきである。すなわち、対象となる事象が要素事象 x_1, x_2 から構成されているならば、確率系では $P(x_1)+P(x_2)=1$ 、論理系では $S(x_1) \cup S(x_2)=T$ （真）が成立している。ここで、 P は事象の確率値を表わすための、 S は事象を論理記号化するための演算子である。

また、確率の積 $P(x_1) \cdot P(x_2)$ に該当する論理表現式は $S(x_1) \cap S(x_2)$ であるのは言うまでもない。

このように対応付けを行なった時、確率系の「解釈のシステム」と双対をなす論理系の「解釈のシステム」を想定する事ができ、その実例が、文章の中に存在するものとみなせる。

言うなれば、文章とはそもそも論理的なシステムであり、論理を基礎とする共通概念があつて、初めてコミュニケーション（意志の伝達）に役立つものである。したがって、文章という論理的なベースシステムに重畳して、筆者の主張する「解釈のシステム」が、その作者の意識如何にかかわらず、存在している可能性があるといえよう。

この事を次章（3章）以下で具体的に述べるに先立ち、言葉の形成について若干の考察をしておきたい。

（1）文字から単語へ

文字がでたらめに集まって単語が作られるのではなく、文字間のある関係がある条件を満足して単語となっている。例えば、英語では $me\ t$ や $ma\ t$ や $me\ a\ t$ は、意味ある単語であるが、 $ma\ e\ t$ や $e\ m\ t$ は無意味である。日本語でも「から」

「おから」「からだ」はそれぞれの意味を持っているが、「らかだ」「らおか」は全く意味をなさない。そんなことは当たり前というのは結果論だから言えるのであり、言語の形成のプロセスとして見たとき、英語や日本語において、何がルールとなったのであろうか、という疑問が解消されるわけではない。ここででの深入りは避けるが、単語のそれぞれがシステムであり、単語群はさらに壮大なシステム体系であるとみる時、どのような原理に基づいて、このシステムは構築されたのかという問題が存在する事を、無視する事は出来ないと思う。それは、我々が日常気軽に喋っているが、なぜかとも円滑に単語を発生(発声)出来るのかという問題に通じるだろう。

(2) 単語から単文へ

単語が作られると、それはある概念を表わすから、今度は概念の結合によって単文が生じる。例えば、「素敵な」「人」「出てくる」という3つの概念に対応する単語から、「素敵な人が出てきた」という単文が作られる。また、「素晴らしい」「記録」「生まれる」という概念から「素晴らしい記録が生まれた」という単文が出来上がる。しかし「素敵な」↔「素晴らしい」、「人」↔「記録」、「出てくる」↔「生まれる」という風に、類似概念ではあるものの、「素敵な記録が出てきた」という言い方はおかしいと感じ、そんな文は作らないわけである。つまり、この場合にも、システム生成のルールがあり、(1)のそれとは異なっているようである⁴⁾。

(3) 単文から文章(文脈)へ

次に示す単文がある。

1. 寒河村(仮名)のお天気は、晴か雨である。
2. 晴のとき、太郎は外で働き、次郎は外で遊ぶ。
3. 雨のとき、太郎は家で読書し、次郎は家で寝ている。
4. 太郎と次郎は兄弟である。

これらは、そのままつなぐ事によりひとつの文章を形作るのであって、寒河村での太郎と次郎という兄弟の生活を描いたものとなる。つまり文脈があり、ひとつのシステムを生み出している。そして、図2に示すような構造を有する。

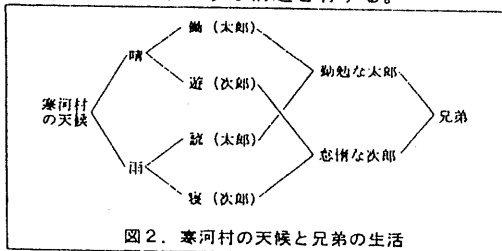


図2. 寒河村の天候と兄弟の生活

ここには、1~4の文章によって作り出される文脈が幾何学的なグラフに表現されている。そして、図1と図2とを比較すると、非常に良く似ている事もわかる。したがって、図2の構造図によって表わされているものを「論理系の解釈のシステム」と称する。この図について、述語論理の表記法を用いると、次に示す論理式、晴(天気)∪雨(天気)=T, 晴(天気)∩働(太郎)=T, 晴(天気)∩遊(次郎)=T, 雨(天気)∩読(太郎)=T, 雨(天気)∩寝(次郎)=T, 勤勉(太郎)=T, 怠惰(次郎)=T, 兄弟(太郎,次郎)=T等が成立する。すなわち、図2は論理的な文脈を解釈のシステムによって把握するのが可能である事を示しているといえよう。

3. 文章の理解と鑑賞へのアプローチ

3.1 単文における文脈の把握

3.1.1 起承転結の構造(マクロな視点)

人口に膾炙されている孟浩然作「春暁」を次に掲げる。

<起>春眠不觉晓 春眠晓を覚えず
 <承>处处闻啼鸟 处处啼鳥を聞く
 <転>夜来风雨声 夜来風雨の声
 <結>花落知多少 花落つること知る多少

これは五言絶句の代表作であり、文字どおり起承転結の順序で論旨が展開されている。この文脈構造は、短い文によって作者の主張を読者に訴えるには非常に適したものであり、1頁くらいの長さ

の序文等においても、頻繁に見られる形式である。したがって、作文法として重要であるばかりでなく、理解の面からも大切な手掛かりを与える。特に、文脈におけるアクセントとしての<転>の役割は大きく、理解から鑑賞へ進む段階では最も大きな影響を持つ。

3.1.2 語句の使用頻度(ミクロな視点)

全体的な文脈の構造把握には、上記の「起承転結」が有効であるが、作者がどのようなテーマに関心を持ち、何を訴えたいかを知る手掛かりとしては、語句の使用頻度を調べるのが役に立つ。

ここに、単文とはいえ、掲載するには長すぎる(約1400字の)新聞記事がある⁵⁾。素粒子「トピックオーク」の存在確認実験をきっかけに、今後物理学の実験と理論がどんな方向にいくかを論じている。この文で繰り返し使われる語句は、「実験及びその等価語」が11回、「素粒子及びその等価語」が11回、「理論」が10回であり、作者の主張はこれら3語句を中心に展開されている事がわかる。なお、全文が14の段落から構成されているので、各段落ごとの使用頻度を図示す

ると、図3のごとくである。

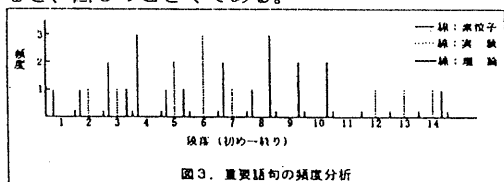


図3. 重要語句の頻度分析

この図から、素粒子をめぐる話題をきっかけにして、実験と理論について論じている文脈が浮かび上がってくる。そこで、理論の頻度が後半低下しているが、段落10から13にわたっては、それに代わる「数学」が6回も登場している事に注目しなければならない。

その結果、この文章が「理論が予想しなかった顔を、実験が可能な世界で見せてくれるかもしれない」で締めくくられている事や、見出し(あるいは表題か?)が、「物理学、実験とは別の道も」となっている事がよく理解でき、これらの2文を合体したところに、作者の意図がある点も読めてくるだろう。

3. 2 概念からイメージへ

3. 2. 1 主旨のイメージ化

前述の記事について、頻出語の検討を中心に得られた結果を図示すると、図4のようになる。

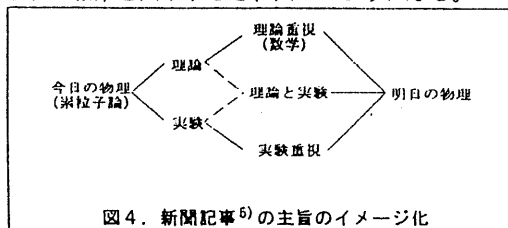


図4. 新聞記事⁶⁾の主旨のイメージ化

これは図2と類似の「解釈のシステム」の構造を念頭において描いたものである。これを見ると、図3からだけではわからない作者の意図が明瞭になってくる。すなわち、従来の素粒子論中心に発展してきた実験物理と理論物理とが方法論としてその限界に近づいてきており、これまで対象とならなかった分野において、新しい理論とその実証法が生まれ、予想されなかった展開が起こる事を期待する文章である事がわかる。

ところで、ピエール・ギローは「ある与えられた状況の中では、常にただ一つの意味が存在する。すなわち文脈の意味である。文脈の中のある語には、あるただひとつの概念的映像が対応しているのだ」と述べている⁶⁾。しかし、この映像が文脈の中でどういう広がりを持っているかは、その文脈の中の語の間にどういう関係が存在するかによる。それを把握するための一つの手法が解

釈のシステムであり、対称性と交差性を基本的な性質とする相補的分枝構造にイメージ化する事である。

したがって、図4は、文章に込められた主旨のイメージ化を意図して描かれたものであり、作者自身の思想を(作者が意識していたかどうかにかかわらず)イメージ化してみせるものである、と言えよう。

3. 2. 2 イメージの喚起

次の文章について考えよう。

「敵の前線と味方の前線が対峙していたとき、敵の塹壕がどよめき、警笛が鳴りひびいた。味方の飛行機が(攻撃のため)飛んできたのだ。」これは、まさに戦端が開かれる直前の様子を表現しており、文脈として、次に続く激しい戦闘(爆撃、対空砲火や白兵戦)の状況描写を彷彿とさせる。そこで、この文章に含まれる言葉の意味を図5のように解釈のシステムによってとらえると、喚起されるイメージはより鮮明となる。

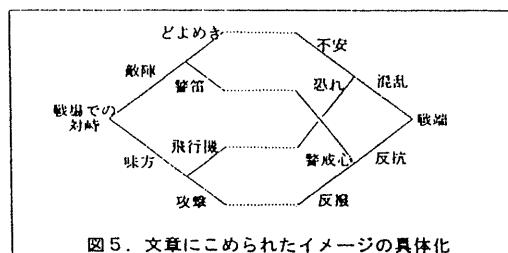


図5. 文章にこめられたイメージの具体化

つまり、図5の左側に記されている言葉は陽に表わされているが、右側には陰に含まれる抽象的言葉が集められ、戦端につながるプロセスを説明している。

換言すれば、左側が文章から得られる表面的理解であり、右側がそれから喚起される抽象的イメージを表わしており、鑑賞の心境に対応するものといえる。

3. 2. 3 隠された概念の明示

これまで述べてきた事は、単語による概念の提示があって、それらが一幅の絵を構成するが如く、相補的分枝構造図としてとらえることによってイメージが沸き起こり、単なる理解以上の認識が生まれるというのであった。しかし、日本語の特徴として、主語の省略以外に、概念が明示されないという事があり、それについて簡単に説明する。

例えば、「今日は天気が悪いが、調子は良い」という文と、「今日は日が悪いが、明日は大安だ」という文を比べてみよう。文の構成という観点からは、この2文は完全に対応するが、意味内容という視点から図6 (i)、(ii)に見るよう

に、全く異なる。

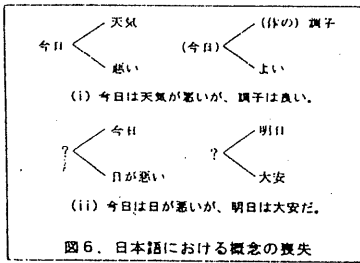


図6. 日本語における概念の喪失

後者の文は、図6 (ii) で示した何事 (something) が省略されているのであり、前後関係 (文脈) から当事者には自明といえる。しかも、文の形式としては決して省略形ではないところに日本語の表現の特徴があり、自明ではありながら、(i) の?のところに、例えば「結婚を申し込むには」を置く事により、文脈を明確化できるので、グラフ化はこの意味でも有用であろう。

3. 3 知性から感性への系譜

3. 3. 1 春暁について

知性を論理的認識とすれば、感性は絵画的認識といえるのではないだろうか。つまり、知性が時系列的 (1 次元的) とすれば、感性は空間的 (2 次元的) なのである。したがって、前者は A → B → C … と表記されるが、後者は A, B, C の相対的關係を 2 次元的に配置する事により表わされる。この配置の組合せは多様であり、論理のように一意的には定まらない。

例えば、前掲の春暁について、知覚されたところを時系列に並べると、

- (1) 気持ちよいまどろみ (の中に)
- (2) (周囲の) のどかな鳥の啼き声 (をきいている)
- (3) (ところが) 昨夜からの激しい風雨 (を思い起こすと)
- (4) 花がたくさん散ったろう (とも思われる)

となるが、感覚的に刺激される感情を言葉にすると、前半に「明るさ、暖かさ、のどかさ、にぎやかさ」があり、後半に「激しさ、寒さ、暗さ、さびしさ」がある。

これらの一群の言葉は、時系列的な感情の起伏 (リズム) を与えるものではなく、絵画的に全体像の中のコントラストを与えるものである。つまり、孟浩然の絶句を感情で受け止めると、感情の 2 次元模様 (イメージ) が浮かんでくるのであり、作者自身山水画を描く意図もあったのではなかろうか。

3. 3. 2 荻原井泉水の俳句について

空をあゆむ 吾朗朗と、月ひとり

(荻原井泉水)

川本は、この俳句について、「空をわたる朗々と月ひとつ」と「地をあゆむ 朗々と吾ひとり」の 2 つの文を合体させて、「人間と月とが一体となっている」様を表現している⁷⁾、という。最初のひとつの句から、このようなふたつの句が生じる理由は、図7の構図から納得される。

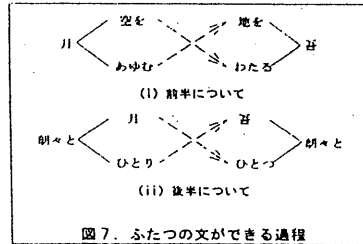


図7. ふたつの文ができる過程

まず、空に月、地に吾という相対峙した事物がある。したがって (i) の構図が得られ、「空をあゆむ」から「空をわたる」と「地をあゆむ」という言葉が概念の交差により生ぜしめられる。同様にして、「月ひとり」から「月ひとつ」と「吾ひとり」が生まれるのである。その結果、上記したように、この句には、天上の月について述べた文と地上の吾について述べた文が同時に含まれていることになり、又そこに、月が吾であり、吾が月であるような渾然一体とした境地をあらわしたものとなっている。

「朗朗と」は、月と吾の両方を形容した言葉とおもわれるが、地上の吾は人影のない道をおそらく朗朗と詩を吟じながら、天空はおそらく一点の曇りもない月だけが煌煌と輝く様を比喩的に述べたのであろう。

これらの検討に基づいて、この俳句の構造を明らかにしたのが図8である。

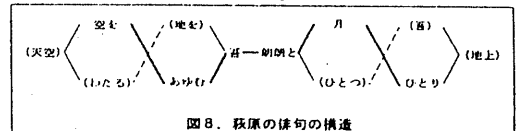


図8. 荻原の俳句の構造

ここで、太線をつないでいけば元の俳句となる。さらに、この図から浮き彫りにされる事は、天と地との間に吾一人が朧々と歩く快感と、しかも月を道連れにしているような幽玄の境地である。

このように、対称性と交差性を基本要素としたグラフ化 (これを広く解釈のシステムと称したい) により、文章をただ音読するだけでは得られない「味わい」を明らかに出来る。つまり、理解から鑑賞に至るのであり、いわば知性から感性への系譜がここにある。この過程は、次に述べる三好達治の詩の検討により、一層明確になる。

4. 三好達治の詩のシステム

4. 1 詩の特徴

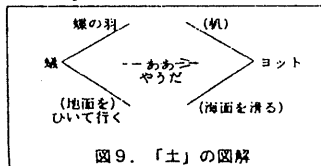
三好達治の詩は、絵画的で、豊かなイメージを喚起するものが多いので、「解釈のシステム」によるモデル化手法をあてはめて、理解するのに好適である。

その代表作は、南窓集に収められた「土」であり、視覚的印象の鮮やかさとそれを活かす比喻の機知（と杉山は表現している⁸⁾）には素晴らしいものがある。それは次のような詩である。

蟻が
蝶の羽をひいて行く
ああ
ヨットのやうだ

解説すると、「蟻にひかれて、蝶の羽がゆらゆらと揺れながら、地面をゆっくり動いていく。その様は、ヨットが風に帆をゆらしながら、静かな海をゆっくりと滑っていくようだ。」と言うのである。これを読む人の心には、蟻が消えてヨットとなり、静かな海が広がって、白い帆が滑り始める。思わず「ああ」と感嘆する事になる。

これ以上の図解は不必要なほど、鮮明な印象を与える作品であるが、あえてグラフ化すれば、図9のようになる。



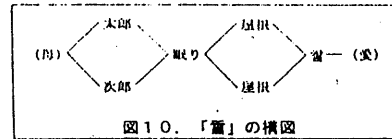
括弧に入れた言葉は表面に出していないが、すぐに脳裏に浮かぶものである。比喻の構造は、この図から明らかである反面、風景を図のように固定化・静止化させたのではなく、時間的要素（ゆっくりと動いている）をもたせた作者の意図は消えてしまっている。さらに、あまり明確ではないが、音読するとわかるように、ゆったりとした音楽性（リズム）は、図9の中に表現不能である。

4. 2 対称性と交差性の情緒感

荻原井泉水の俳句において、空と月、吾と月、あゆむとわたる、ひとりとひとつが対称的に配置され、言葉の使用が図8に示すごとく交差している事から、この句の含意する範囲が広がり、独特の情緒感が生まれている事を述べた。この趣は、

三好達治の「雪」では、一層明らかとなる。すなわち、次の詩「雪」は、

太郎を 眠らせ 太郎の屋根に雪降り積む
次郎を 眠らせ 次郎の屋根に雪降り積む
一瞥してして明らかな、音韻的なリフレイン（繰り返し）の心地好さを訴えるだけではなく、状景を並列させて、視覚的なリフレインを演出している。また、後半の太郎と第2文の前半の次郎を交換しても、意味とリフレインの効果は変わらない。これは、交差性があるという事である。また、太郎と次郎は仲のよい幼い兄弟なのであろう、と思わせるが、これは第1文と第2文との間の対称性がその原因である。したがって、これを図示すれば図10の如くである。



ここでは、静かな夜、母の愛の如く屋根が兄弟を守り、真白い雪の如く一点の汚れの無い愛が、幼い二人を包みこむのである。もちろん、時間は静止している。言うなれば、白黒の山水画の趣がある。

4. 3 「贅のうえ」の叙情性

詩とは、我々が日常何気なく見ている世界を改めて気付かせるものと言われるが、三好の詩「贅のうえ」は正しくその感がある。桜の季節に寺の境内を若い女性連れが楽しそうに話しながら歩いていく。作者も見るともなく、同じ場所を散歩している、というありふれた体験が、かくも美しい風景となるかと思われるのである。その詩の前半は、次のようである。

- (a) あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかな遊音空にながれ
- (b) おりふしに臆をあげて
鬚りなきみ寺の春をすぎゆくなり

杉山によると「三好達治は、風景をあくまで正確に明瞭にしながら、その時間化、音楽化をわかった」と述べている⁸⁾。その様な詩として、「贅のうえ」は、おそらく代表作であろう。このグラフ化は、やや難しいが、図11のようになる。

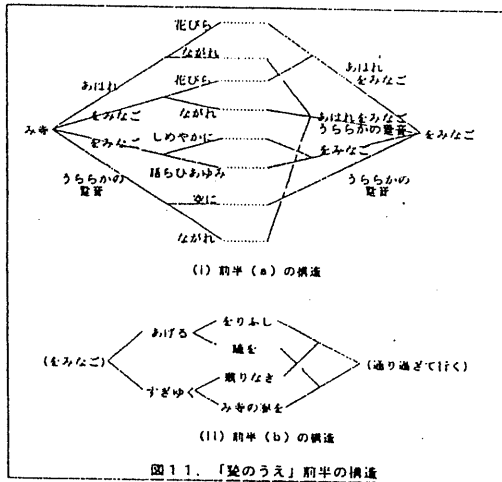


図11. 「麓のうえ」前半の構造

後半は、「ゆったりと流れる川のような視点の移動と共に描かれる絵画の世界」⁸⁾を提供する。すなわち、

み寺の麓 みどりにうるほひ
 廂々に
 風鐸のすがたしづかなれば
 ひとりなる

わが身の影をあゆます麓のうへ

そこでは、作者のまなざしが読者を誘いながら、麓から廂、廂から風鐸へ、さらにわが身の影に移っていく。それは、ゆったりと流れる川のような視点の移動であり、次々と眼前に現れてくる壁画を見るような叙(抒)情感あふれる世界である。これをグラフ化すれば、図12のごとくである。

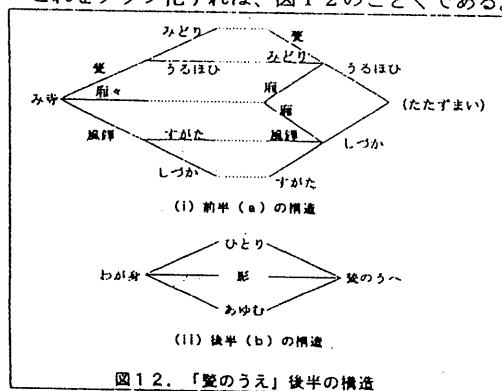


図12. 「麓のうえ」後半の構造

さて、図11 (i) (ii)、図12 (i) (ii)を通覧すると、落ち着いた雰囲気の内の中を花

びらから麓のうへの影にいたる視点の動きが、絵画を描き出す魔法の筆のように鮮やかな光景を現出していく様(絵画性の文脈コンテクスト)を感じとることができる。なお、この詩には、視点の流れとともに、「土」にみられた、ゆっくりと動く時間があるので、それが4つのグラフに分割して表わさざるを得なかった理由である。この場合、時間のコンテクストは、どうなっているかは、残念ながら、視点の移動ほど明確に表現できない。

しかしながら、このようなグラフ化が三好達治の詩の鑑賞に有力な手掛かりとなる、と主張してよいのではなかろうか。

5. 差異化のシステムとしての詩

詩はひとつのシステムである、と言える。2. 2節で述べたように、単語が既にシステムであり、文や文章もシステムであるという意味では、詩がシステムである事に、異論はないであろう。

では、どのようなシステムであるのか、入力があり、それらが処理されて出力が与えられるような情報処理システムのシステムではない事は明らかである。どのようなシステムとして表現できるか、と言え、坂部の表現を⁹⁾若干修正して次のように表わせようか。

詩に映された<かけ>は世界をうつしている。いわゆる実在の世界を差異化し、分節し、識別せしめる差異化のシステムが、詩であって「読者を無意識のうちに、実在から<かけ>の世界へ誘うもの」である。

とすれば、この差異化の働きをどのようにして把握したらよいか詩を読むときの課題である。しかし、これは容易ではない。正しい理解に基づいた的確な鑑賞があって、詩(又は詩人)の狙った差異化が読者の心に訴え、何かを心証として生ぜしめるのである。

漠然と詩を通読しても、そこまでいくのは、なかなか難しいであろう。そこで、差異化のシステムとしての詩の構造に接近する一つの手段として、分枝構造に基づくグラフ化を提案した。それは、詩のための手段としてだけでなく、より一般的な「解釈のシステム」としての性質を有するものであり、広く文化的現象の理解にも資するものである。

6. 考察

詩文鑑賞の手法として、解釈のシステムの考え方を援用できると主張してきたが、類似テーマを扱うほかの研究分野との関連を簡単に説明しておきたい。

6. 1 自然言語理解との関連

自然言語の理解とは、次に示す事のどれかが出来る事だとされる¹⁰⁾。

(1) 知識を使うパターンマッチによる推論を手続きで表現できる事

(2) 質問という形の言語表現が指示している内容をデータベース検索のための質問として表現できる事

(3) 文を構文木やセマンティックネットワークや論理式で表現できる事

これらは、コンピュータによる処理を前提とした時の理解の定義であるが、人が言葉や文章を理解するという事も、こういう心的プロセスが生じているのであらうと思われる。

この意味で、本論文は「自然言語の理解」を自指したものではなく、このような理解が得られた上で、「文脈の理解」に関連した手法を検討したものである。この「文脈の理解」にあたって、常識等を含め、文間を読む事がポイントとされている¹¹⁾が、どんな文脈が存在するかを考える事も必要である。それは、文脈には絵画性、音楽性、時間性の3種類の文脈が存在し、それぞれがどういう構造を持っているかを調べる事が前提とされねばならない。特に、俳句や詩の中には、絵画性文脈を重視したものがあり、その構造を知ることが文脈理解と鑑賞にあたって、非常に重要であると考えたのである。

6. 2 国語教育との関連

国語の授業の基本的流れは、教科書を通読して大意を把握し、それにしたがって語義の解釈を行うという手順だとおもわれる。この時の大意の把握の手法は、熟読以外にないようである。それをなぜかと言えば、文脈とは何かという事がそもそも曖昧であり、その把握とは、「粗筋を掴むこと」程度の理解しかないからである。

この観点からすれば、(1)文章における文脈とは何であり、(2)文脈の理解とは何が出来る事なのかについて、前述の「自然言語の理解」におけるほど、技術的表現化されたものは現在見当たらない。

その意味で、本論文で提案する手法が、文章として1000字以下くらいの短文の場合に有効な

手法となることを期待している。また、この成果は国語教育の改善にも活かす事ができるであろう。

7. おわりに

もともと、筆者の考案に「解釈のシステム」があり、種々の問題解決に応用出来るのではないかとおもっていた。その頃たまたま(昔から愛唱していた)三好達治の詩について書かれた著作⁸⁾に接し、絵画性の強い詩という点に改めて共感し、その構造をグラフ化できるかもしれない、と考えた。

しかし、それまで筆者は確率系のシステムを念頭にしていたため、分枝構造化するのが困難であったが、論理系システムとして、述語論理表現を考えながら、グラフ化してみたところ、何とか構造化できそうであった。

という事から、一般的手法として体系的に論理展開するのに都合のよい題材を集めて検討したのである。

最後にあたり、原稿清書化に協力して頂いた本学経営管理学科4年高木秀朗君に感謝いたします。

参考文献

- 1) 時枝誠記:文章研究序説, p. 256, 山田書院(1965)
- 2) 古閑:解釈のシステムの定義と解析(異形仮像システム), 情報処理学会論文誌に投稿中(1994/3/11受付)
- 3) 古閑:利益問題における情報エントロピー及び分枝構造の意義, 情報研報, Vol. 93, No. 78, pp. 1-8(1993/9)
- 4) 入谷敏男:ことばの生態, 日本放送出版協会, p. 204(1974)
- 5) 新庄直樹:コラム私の見方, 朝日新聞東京本社12版(1994/5/3)
- 6) ビエール・ギロー, 佐藤信夫訳:意味論, p. 151, 白水社(1990)
- 7) 川本茂雄:ことばとイメージ記号への旅立ち一, p. 195, 岩波新書(1986)
- 8) 杉山平一:三好達治「風景と音楽」, p. 237, 編集工房ノア(1992)
- 9) 坂部恵:仮面の解釈学, 東大出版会(1979)
- 10) 野村浩郷:自然言語理解の構造—理解の表現, 情報処理「自然言語理解」大特集, Vol. 30, No. 10, pp. 1161-1168(1989)
- 11) 上記特集における「文脈理解」に関する3編の論文, pp. 1191-1215(1989)
- 12) 長尾確:自然言語処理技術の最近の動向, 情報処理, Vol. 33, No. 7, pp. 741-745(1992)